

# 十和田湖

泉鏡太郎

青空文庫



「さて何うも一方ならぬ御厚情に預り、少からぬ御苦勞を掛けました。道中にも旅店にも、我儘ばかり申し、今更お恥しう存じます、しかし俵、駕籠……また夏座敷だと申すのに、火鉢に火をかかんかん……で、鉄瓶の湯を噴立たせるなど、私としましては、心ならずも止むことを得ませんので、決して我意を募らせた不届な次第ではありません。——これは幾重にも御諒察を願はしう存じます。

——古間木（東北本線）へお出迎ひ下さつた以来、子の口、休屋に掛けて、三泊り。今また雑と一日、五日ばかり、私ども一行に対し……申尽くせませんまで、種々お心づかひを下さいましたのも、たゞ御礼を申上げるだけでは済みません。御懇情はもとよりでございますが、あなたは保勝会を代表なすつて、湖の景勝頭揚のために、御尽力をなすつたので、私が、日日社より旅費を頂戴に及んで、遙々と出向きましたのも、又そのために外なりませんのでございますから、見聞のまゝを、やがて、と存じます。けれども、果して御期待にかなひますか、如何か、その辺の処は御

寛容を願ひたう存じます。たゞしかし、湖畔五里余り、沿道十四里の間、路傍の花を損なはず、樹の枝を折らず、靈地に入りました節は、巻 蓆の吸殻は取つて懐紙へ——マツチの燃えさしは吹き消して、もとの箱へ納めましたことを憚りながら申し出でます。何は行届きませんでも、こればかりは、御地に対する礼儀と真情でございます。」

「はあ——」

……はあ、とそつ気はないが、日焼けのした毛だらけの胸へ、ドンと打撞りさうに受け容れらるる、保勝会の小笠原氏の——八月四日午後三時、古間木で会うてより、自動車に揺られ、舟に揉まれ、大降小降幾度か雨に濡れ、おまけに地震にあつた、裾短な白 緋の赤くなるまで、苦勞によれくの形で、黒の信玄袋を緊乎と、柄の巖 丈な蝙蝠傘。麦稈帽を鷲 掴みに持添へて、膝までの靴足袋に、革紐を堅くかゞつて、赤靴で、少々 抜衣紋に背筋を膨らまして——別れとなればお互に 峠の岐路に 悄 乎と立つたのには——汽車から溢れて、風に吹かれて来た、木の葉のやうな旅人も、おのづから哀れを催し、挨拶を申すうちに、つい其誘はれて。……図に乗つたのでは決してない。……

「十和田の神も 照覽あれ。」

と言はうとして、ふと己を顧みて呆れ返つた。這個髯斑に眼円にして面赤き辺塞の驍將に對して、爾き言を出さむには、當時流行の劍劇の朱鞘で不可、講談もの、鉄扇でも不可い。せめては狩衣か、相成るべくは、緋緘の鎧……と気がつくど、暑中伺ひに到来の染浴衣に、羽織も着ず、貝の口も横つちよに駕籠すれして、も欲しさうに白足袋を穿いた奴が、道中つかひ古しの蟹目のゆるんだ扇子では峠下の木戸へ踞んで、秋田口の觀光客を——入らはい、と口上を言ひさうで、照覧あれは事をかしい。

「はあ。……」

「え、しかし何は御不足でも医学博士、三角康正さんが、この一行にお加はり下すつて、篤志とまでも恩に着せず、少い徳本の膝栗毛漫遊の趣で、村々で御診察をなすつたのは、御地に取つて、何よりの事と存じます。」

「はあ、勿論であります。」

「それに、洋画家の梶原さんが、雨を凌ぎ、波を浴びて、船でも、巖でも、名勝の実写をなすつたのも、御双方、御会心の事と存じます。尚ほ、社の写真班の英雄、三浦さんが、自籠巖を駆け上り、御占場の鉄階子を飛下り、到る処、手練

のシヤターを絞つたのも、保勝会の皆様はじめ、……十和田の神……」

と言ひかけて、ぐつとつまると、白のづぼん、おなじ胴衣、身のたけ此にかなつて風采の揚がつた、社を代表の高信さん、傍より進み出で、

「では此で、……おわかれをいたします。」

小笠原氏は、くるり向直つて、挙手をしさうな勢ひで、

「はあ。」

これは、八月七日の午後、秋田県鹿角郡、生出を駕籠で上つて……これから三瀧街道を大湯温泉まで、自動車で一氣に衝かうとする、発荷峠、見返茶屋を、…

…なごりの湖から、向つて右に見た、三岐の一場面である。

時に画工——画家、画伯には違ひないが、何うも、画工さんの方が、分けて旅には親味がある（以下、時に諸氏に敬語を略する事を恕されたし。）貫五さんは、この峠を、もとへ二町ばかり、樹ぶり、枝ぶり山毛櫨の老樹の、水を空にして、湖の雲に浮いた、きりぎし断崖の景色がある。「いゝなあ、この山毛櫨一本が、こゝで湖を支へる柱だ。」そこへ画架を立てた——その時、この峠を導いて、羽織袴で、阪へ掛かると股立を取つた観湖楼、和井内ホテルの御主人が、「あ、然やうで。樹木は一枝も大切にいたさな

ければ成りませんな。素人目にも、この上り十五町、五十六曲り十六景と申して岩端、山口の処々、いづれも交る／＼、湖の景色が変りますうちにも、こゝは一段と存じました。さいはひ峠上の茶屋が、こゝへ新築をいたすのでございます。「背後の山懐に、小屋を掛けて材木を組み、手斧が聞こえる。画工さんは立処にコバルトの絵の具を溶いたし、博士は紫の蝶を追つて、小屋うらの間道を裏の林に入つたので——あと四人は本道を休茶屋へ着くと、和井内の主人は股立を解いて、別れを告げたのであつた。(註。観湖楼の羽織袴は、特に私たちの為ではない、折から地方の頭官の巡遊があつた、その送迎の次手である。)

写真班の英雄は、乃ちこの三岐で一度自動車を飛下りて、林間の蝶に逍遙する博士を迎ふるために、馳せて後戻りをした処である。——

方々々の様子は皆略分つた、いづれも、それ／＼お役者である。が、白足袋だつたり、浴衣でしよたれたり、貝の口が横つちよだつたり、口上を述損つたり……一体それは何ものだい。あゝそつとく私……です、拙者、拙者。

英雄三浦の洋装の、横肥にがツしりしたのが、見よ、肩の上の山の端に頭はれた。三岐を目の下にして、例の間道らしいのを抜けたと思ふが、横状に無理な崖を

するりと這つて、自動車じどうしゃの屋根やねを踏ふみ跨またぐか、とドシンと下おりた。汗あせひとつつかいて居ゐない。尤もつとも、つい此この頃ごろ、飛行機ひかうきで、八景はっけいの中うちの上高地かみかうちの空そらを飛とんだと言いふから、船ふねに乗のつても、羽はねが生はえて、ひらくと、周囲しうゐ十五里りの湖みづうみの上うへを高く飛とびさうでならなかつた。

闊歩くわつぽ横行わうかう、登攀とうはん、跋涉ぼつせふ、そんな事ことはお茶ちやの子こで。——

思おもへば昨日きのふの暮前くれまへであつた。休屋やすみやの山やまに一座ざかぞび聳そびえて巖山いはやまに鎮座ちんざする十和田神わだしんじ社やに詣まうで、裏岨うらそばになほ累かさり累かさる峻しんしい巖いはを爪つまた立たつて上のぼつた時ときなどは……同行どうかうした画ゑ工かきさんが、信しんの槍やりも、越えつつるぎ、此これを延えんちやうら、お恥はづかしいが、私わたしにしては生うまれてはじめての冒険ぼうけんで、足萎あしなえ、肝消きもきえて、中途ちうとで思おもはず、——絶頂ぜつちやうの石いしの祠ほこらは八幡宮まんぐうにてましますのに、——不動明王ふどうみやうわう、と念ねんずると、やあ、といふ掛声かけこゑと、もに、制迦せいたかの如ごとく頭あちはれて、写真機しやしんきと附属品ふぞくひんを、三鉗さんこと金剛杵こんかうしよの如ごとく片手かたてにしながら、片手かたてで、帯おびを挿つかんで、短軀たんくせうしん小身けんぶつの見物けんぶつを宙ちうに釣つつて泳およがして引ひき上げた英雄えいゆうである。岩魚いはなの大だいを三匹びきく食くつて咽喉かほを渴かかすやうな尋常じんじやう常じやうなのではない。和井内自慢わゐないじまんのカバチエツポの肥ふとつた処ところを、二尾塩ふたつしほ焼きでべろりと平たひらげて、あとお茶漬ちやづけさらさらで小楊子こようじを使つかふ。……

いや爰こゝでこそ、吞氣のんきらしい事ことをいふものゝ、磊々らいくたる巉巖ざんがんの尖頂せんちやうへ攀よぢて、大だ



菩薩いぼさつの小さな祠ちひの、たゞ掌てのひらに乗るばかり……といった処ところで、人間にんげんのではない、毘沙びしゃ門天んでんの掌てのひらに据する給たまふ。宝塔ほうたふの如ごときに接せつした時は、邪氣じやきある凡夫ほんぷは、手足てあしもすくんでそのまゝに踞しやがんだ石猿いしざるに化ならうかとした。……巖いはの層そうは一枚まいづゝ、巖おごそかなる、神将しんしやうの鎧よろひであつた、謹つよしんで思おもふに、色気いろけある女人にょにんにして、悪わるく絹手巾きぬはんかちでも捻ねぢらうものなら、たゞ翻ほん々と木の葉はに化けして飛とぶであらう。それから跣足はだしになつて、抱かへられるやうにして下くだつて、また、老樹らうじゆの根ね、大巖おほいはの挟間さまを左ひだりに五段だん、白樺しらかばの巨木きよほくの下したに南祖坊なんそぼうの堂だうがあつた。右みぎに三段だん、白樺しらかばの巨木きよほくの下したに、一龍神りうじんの祠ほこらがあつた。……扉浅とびあきうして、然しかも暗くらき奥おくに、一個人こにんめん面蛇めんじやたい体の神かみの、軀からだを三畝うねり、尾をと共に一口ふりの劍つるぎを絡まとうたのが陰影いんえいに立たつて、面おもては劍つるぎとゝもに真青まつあをなのを見みた時ときよ。

## 二

この祠ほこらを頂いたゞく、鬱樹うつじゆの梢こずえさがりに、瀧窟たきむろに似た径こみちが通とほつて、断崖きりぎしの中腹ちゆうふくに石溜いしづかひらりの巖いは僅かひらに拓たゞげ、直たゞちに、鉄くろがねの階はしこ子が架かる、陰々いんくたる汀みぎはこそ御占場おうらなひばと称しょうするので——(小船こぶねは通とほるさうである)——画工ゑかきさんと英雄えいゆうとは、そこへ——おのおの……畠はたけ

山の馬ではない、……猪を抱き、鹿をかつぐが如き大荷のまゝ、ずるゝと梢を沈んだ。高信さんは、南祖坊の壇の端に一息して向うむきに煙草を吸つた。私は、龍神に謝しつゝも、大白樺の幹に縋つて、東が恋しい、東に湖を差覗いた。

場所は、立出でた休屋の宿を、さながら谷の小屋にした、中山半島——此の半島は、恰も龍の、頭を大空に反らした形で、居る処は其の腮である。立てる絶壁の下には、御占場の崖に添つて業平岩、小町岩、千鶴ヶ崎、蟬燭岩、鼓ヶ浦と詠續いて中山崎の尖端が牙である。

相対向ふものは、御倉半島。また其の岬を大蛇灘が巻いて、めぐつて、八雲崎、日暮崎、鴨崎、御室、烏帽子岩、屏風岩、剣岩、一つ一つ、神が斧を打ち、鬼が、鉞を下した如く、やがては、巨匠、名工の、鑿鑿の手の冴に、波の珠玉を鏤め、白銀の雲の浮彫を装ひ、緑金の象嵌に好木奇樹の姿を凝らして、粧壁彩巖を刻んだのが、一目である。

折から雨のあとの面打沈める蒼々漫々たる湖は、水底に月の影を吸はうとして、薄く輝き渡つて、沖の大蛇灘を夕日影が馳つた。

再び云ふ、東向うに、其八雲、日暮崎、御室の勝に並んで半島の真中一処、

くも すべ みづうみひた 雲より三つて湖に浸る巖壁一千丈、頂の松は紅日を染め、夏霧を籠めて紫に、半ば  
 やまはだ つちあか みぎは みつじゆりよくりん 山肌の土赭く、汀は密樹緑林の影濃かに、此の色三つを重ねて、ひたくと映つて、  
 あゝうか みどりひそ 藍を浮か、みどりひそ 藍を浮か、みどりひそ 藍を浮か、みどりひそ 藍を浮か、みどりひそ 藍を浮か、  
 きばんくわ ほたちまひら 碧万顆の星條ち開いて、颯と流るゝ七彩の虹の末を湖心最も深き処、水深一千二百  
 しやくせいりう おほい 尺の青龍の偉なる暗き口に呑む。

それが、それが、目の下にちらちらと、揺れに、揺れる。……夜の帳はやゝ迫る。……  
 あゝ、美しさに気味が悪い。

そこに、白鳥の抜羽一枚、白帆の船ありとせよ。 蝸牛の角を出して、櫓を操る  
 ものありとせよ、青蟲の流るゝ如き発動汽艇の泳ぐとせよ。

私は何となく慄然とした。

みづうみ 湖ばかり、わればかり、船は一艘の影もなかつた。またいつも影の形に添ふやうな小笠  
 はらし 原氏のみなかつたのは、土地の名物とて、蕎麦切を夕餉の振舞に、その用意に向い  
 たので、今頃は、手を貸して麵棒に腕まくりをしてゐやうも知れない。三角さんは、  
 やすみや 休屋の浜ぞひに、恵比寿島、弁天島、兜島を、自籠の岩——（御占場の真う  
 しろに当たる）——掛て、ひとりで舟を漕ぎ出した。その間に、千年の杉の並木を深く、

私たちは参詣したので。……

乃ち山の背面には、岸に沿ふ三角さんの小船がある。たゞその人が頼りであつた。少々怪我ぐらゐはする覚悟で、幻覚、錯視かと自ら怪しむ、その水の彩りに、一段と、枝にのびて乗出すと、余り奇麗さに、目が眩んだのであらう。此の、中の湖の一面が雨を呼ぶやうに半スツと薄暗い。

ために黒さに艶を増した烏帽子岩を頭に、尾を、いまの其の色の波にして、一筋御占場の方を尾に、烏帽子岩に向つて、一筋。うねくと薄く光る水二条、影も見えない船脚の波に引残されたやうなのが、頭丸く尖り胴長くうねり、脚二つに分れて、たとへば(号)が横の(八)の字に向合つて、湖の半を領して浮び出た、ものゝ形を見よ。——前日、子の口の朝の汀に打ち群るゝ、餌色の小蝦の下を、ちよろくと走つた——まつくろ真黒な蝶螺に似て双ながら、こゝに其の丈十丈に余んぬる。

見るく、其の尾震ひ、脚蠢き、頭動く。……驚破、相噛まば、戦はゞ、此波湧き、此巖崩れ、われ怪し飛ぶ、と声を揚げて「康正さん。」博士たすけよ、と呼ぶむとする時、何と、……頸寄り、頬重り、脚抱くと視るや、尾を閃めかして接吻をした。風と、もに黒い漣が立蔽つた。

「うらなひ　うらなひ  
占は……占は——」

刃に曳いて、崖下の樹の中、深く、画工さんの呼ぶのが聞こえて、

「……凄（すい）いぞう。」

と、穴に籠つたやうな英雄の聲が暗い水に響いた。

「やあ、これは。」

高信さんが、そこへ、ひよつくり頭はれた、神職らしいのに挨拶すると、附添つ

て来た宿屋の番頭らしいのが、づうと出て、

「今これへ、おいでの皆様は博士の方々、でおいでなさりますぞ。」

十四五人、仙台の学校からと聞く、洋服の紳士が、そろくと続いて見えた。：

：

——のであつた。——

時に英雄が発荷峠で……

「博士は、一車あとへ残らるゝさうです。紅立羽、烏羽揚羽、黄と白の名からして、

おつにん蝶、就中、（小紫）などといふのが周囲についてみますから、一寸山

から出さうにもありませんな。」

——この言は識をなした。翌々夜の秋田市では、博士を蝶の取巻くこと、大略斯の通りであつた。もとより後の話である。

わたし  
私はいつた。

「蝶々の診断をしてゐるんだ。大湯で落合ひましやうよ、一足さきへ……」

……実は三日余り、仙境靈地に心身共に澄切つて、澄切つた胸さきへ凡俗の氣が見透くばかり。そんなその、紅立羽だの、小紫だの、高原の佳人、お安くないのにはおよばない、西洋化粧の化粧紫、ござんなれ、白粉の花ありがたい……早く下界へ遁げたいから、真先に自動車へ。

駕籠を一挺、駕籠屋が四人、峠の茶屋で休んだのが、てくくと帰つて来た。

「いや、取紛れて失念をしようとした。ほんの寸志だよ。」

高信さんが、銀貨を若干、先棒の掌へポンと握らせると、にこりと額をうつむけた処を、

「いくら貰うたかい。」

小笠原氏が、真顔で、胡麻髯の頬を寄せた。

「へい。」と巖丈に引握つた大きな掌をもつさりと開ける、と光る。

「多からうが。多いぞ。お返し申せ。——折角ですが、かやうな事は癖になりますで、以来悪例になりますでな。」

お律義お律義、いつもその思召で願ひたい、と何の道此処は自腹でないから、私は一人で褒めてゐる。

「いやく、それはそれ、これはこれ、たゞ些少の志ですから。……さあく若い衆、軽く納めて。」

馴れて如才ない扱ひに、苦つた顔してうなづいて、

「戴いて置け。礼を言へい。」

「それ、急げ。」

英雄は、面倒くさい座席になど片づくのでない。自動車も免許取だから、運転手台へ、ポイと飛び上ると、「急げ。」——背中を一つ引撲く勢ひだから、いや、運転手の飛ばした事。峠から下す風は、此の俗客を吹きまくつた。

「や、お精が出ますなあ。」

坂の見霽で、駕籠が返る、と思ひながら、傍目も触らなかつた梶原さんは、——その声に振り返ると、小笠原氏が、諸肌ぬぎになつて、肥腹の毛をそよがせ、腰に離

さなかつた古手拭を頸に巻いた。が、一役済まして、ほつと寛いだ状だつたさうである。「さすがに日当りは暑いですわい。」「これから何方までお帰りです。」法奥沢村の名望家が、「船さ出れば乗るのですがな、都合さ悪ければ休屋まで歩行きますかな。月がありますで、或は陸路を子の口へ帰るですわい。」合はせて六里余、あの磯たる樵路を、連もなく、と思ふと、三角先生に宜しく、と挨拶して、ひとり鶯然として峠を下る後態の、湖は広大、山毛櫨は高し、遠見の魯智深に似たのが、且軍敗れて、鎧を棄て、雑兵に紛れて落ちて行く宗任のあはれがあつた。……とその夜、大湯の温泉で、おしろひの花にも似ない菜葉のやうなのに酌をされつゝ、画家さんが私たちに話したのであつた。

——却説前段に言つた。——海岸線まはりの急行列車が古間木へ（此の駅へは十和田繁昌のために今年から急行がはじめて停車するのださうで。）——着いたとき、旅行に経験の少い内気ものゝあはれさは、手近な所を引較べる……一寸伊豆の大仁と言つた気がしたのである。が、菜の花や薄の上をすらすらと、すぐに修善寺へついて、菖蒲湯に抱かれるやうな、優しいのではない。駅を右に出ると、もう心細いほど、原野荒漠として、何とも見馴れない、断れ雲が、大円の空を飛ぶ。八方草ば



かりで、遮るものはないから、自動車は波を立て、砂に馳しり、小砂利は面を打つ凄じ  
 さで、帽子などは被つて居られぬ。何、脱げば可さうなものだけれど、屋根一つ遠くに  
 見えず、枝さす立樹もなし、あの大空から、遮るものは唯麦藁一重で、赫と照つては  
 急に曇る……何うも雲脚が気に入らない。初見の土地へ対しても、すつとこ被りもな  
 るまいし……コツツンと音のするまで、帽子の頂辺を敲いて、嵌めて、「天気模様は如  
 何でせうな。」「さあ——」「降るのは構ひませんがね、その雷様は——」小笠原氏  
 は、幌なしの車に、横ざまに背筋を捻ぢて、窓に腰を掛けたやうな形で飛び飛び、「昨日  
 一昨日と三日続けて鳴つたです、まんづ、今日は大丈夫でがせうかな。」一行五人と、  
 運転手、助手を合はせて八人犇と揉んで乗つた、真中に小さくなつた、それがしの  
 顔色少からず憂鬱になつたと見えて、博士が、肩へ軽く手を掛けるやうにして、  
 「大丈夫ですよ、ついて居ますよ。」熟々案ずれば、狂言ではあるまいし、如何  
 に名医といつても、雷神を何うしようがあるものではない。が、面喰つて居るから、  
 この声に、ほつとして、少しばかり心が落着いた。  
 落着いて見ると……「あゝ、この野中に、優にやさしい七夕が……。」又慌てた。丈  
 より高い一面の雑草の中に、三本、五本また七本、淡い紫の露の流るゝばかり、且

とところ 飛ぶ処に、莖の高い見事な桔梗が、——まことに、桔梗色に咲いたのであつた。  
 さん 去ぬる年、中泉から中尊寺に詣でた六月のはじめには、細流に影を宿して、山  
 まぶき 吹の花の、堅く貝を刻めるが如く咲いたのを見た。彼は冷き黄金である。此は温かき  
 るり 瑠璃である。此日、本線に合して仙台をすぐる頃から、町はもとより、野の末の一軒  
 んやふもと 家の麓の孤屋の軒に背戸に、垣に今年竹の真青なのに、五色の短冊、七彩の糸を結ん  
 で掛けたのを沁々と床しく見た、前刻の今で、桔梗は星の紫の由縁であらう。……  
 ととき 時に靡きかゝる雲の幽なるさへ、一天の銀河に髣髴として、然も、八甲田山を打蔽  
 ふ、陸奥の空は寂しかつた。

われらは、ともすると、雲に入つて雲を忘るゝ……三本木は、柳田国男さんの雑誌——  
 一（郷土研究）と、近くまた（郷土会記録）とに教へられた、伝説をさながら  
 じじつ 事実に殆ど奇蹟的の開墾地である。石沙無人の境の、家となり、水となり、田となり、  
 むら 村となつた、いま不思議な境にのぞみながら、古間木よりして僅に五里、あとなほ十里を  
 ひかへた——前途の天候のみ憂慮はれて、同伴に、孫引のもの知り顔の出来なかつた  
 のを遺憾とする。

八人では第一乗溢れる。飛ぶ輻の、あの勢ひで溢れた日には、魔夫人の扇を以て煽が

れた如く、漂々蕩々として、虚空に漂はねばなるまい。それに各荷が随分ある。恚くいふ私にもある。……大きなバスケットがある。読者知るや、瑛さんと芥川（故……あゝ、面影が目に見える）さんが、然も今年五月、東北を旅した時、海を渡つて、函館の貧しい洋食店で、瑛さんが、オムレツを啣んで、あゝ、うまい、と嘆じ、

冴返る身に沁々とほつき貝

と、芥川さんが詠じて以来、——東京府の心ある女連は、東北へ旅行する亭主の為に鯉のでんぶと、焼海苔と、梅干と、氷砂糖を調へることを、陰膳とともわすに忘れない事に成つた。女に心があつてもなくても、私も亭主の一人である。そのでんぶ、焼海苔など称ふるものをしたゝか入れた大バスケットがあるゆゑである。また不断と違ふ。短軀小身なりと雖も、かうして新聞から出向く上は、紋着と袴のたしなみはなくてはなるまいが、酔つ払つた年賀でなし、風呂敷包で背負ひもならずと、……友だちは持つべきもの、緑蝶夫人といふ艶麗なのが、麴町通り電車を向うへ、つい近所に、家内の友だちがあるのに——開けないと芬としないが、香水の薫りゆかしき鬢の毛ならぬ、衣裳鞆を借りて持つた。

次手に、御挨拶を申したい。此の三本木の有志の方々から、こゝで一泊して晚餐  
 と一所に、一席の講話を、とあつたのを、平におわびをしたのは、……かるがゆゑに袴が  
 なかつた為ではない。講話など思ひも寄らなかつたからである。しかし惜しい事をした。  
 いま思へば、予て一本を用意して、前記（郷土会記録）載する処の新渡戸博士の三本  
 木開墾の講話を朗読すれば可かつた。土地に住んで、もう町の成立を忘れ、開墾  
 当時の測量器具などの納めた、由緒ある稲荷の社さへ知らぬ人が多からうか、と思ふ  
 につけても。――  
 人と荷を分けて積むため、自動車をもう一台たのむ事にして、幅十間と称ふる、規模  
 の大きい、寂びた町の新しい旅館の玄関前、広土間の卓子に向つて、一休みし  
 て巻蓑を吹かしながら、ふと足元を見ると、真下の土間に金魚がひらひらと群れ  
 て泳ぐ。寒国では、恚うして炬を切つた処がある。これは夏の待遇に違ひない。贅  
 沢なものだ。昔僭上な役者が硝子張りの天井に泳がせて、仰向いて見たので  
 さへ、欠所、所払ひを申しつかつた。上からなぞは、と思ひながら、止せばいゝの  
 に、――それでも草履は遠慮したが、雪靴を穿いた奥山家の旅人の気で、ぐい、  
 と踏込むと、おゝ冷い。ばちやんと匆ねて、足袋はびつしより、わアと椅子を傾けて飛

上ると、真赤になつて金魚が笑つた。あはは、あはは。

いや、笑事ではない。しばらくして——東は海を限り、北は野辺地に至るまで、東

西九里、南北十三里、周圍十六里。十里まはりに笠三蓋と諺にも言ふ、その笠三蓋と

ても、夏は水のない草いきれ、冬は草も見ぬ吹雪のために、倒れたり、埋れたり、行方も

知れなくなつたと聞く。……三本木原の真中へ、向風と、轍の風に吹放された

時は、沖へ漂つたやうな心細さ。

早く、町を放れて辻を折れると、高草に遙々と道一筋、十和田に通ふと聞いた頃

から、同伴の自動車が続かない。私のは先へ立つたが、——説明を聞くと、砂煙

がすさまじいので、少くとも十町あまりは間隔を置かないと、前へ進むのはまだしも、

後の車は目も口も開かないのださうである。——この見果てぬ曠野に。

果せるかな。左右見渡す限り、苜蓿の下臥す野は、南部馬の牧場と聞くに、時

節とて一頭の駒もなく、雲の影のみその幻を飛ばして一層寂しさを増した……茫茫たる

牧場をやゝ過ぎて、道の弧を描く処で、遠く後を見返れば、風に乗つた友船は、千

筋の砂煙をかぶつて、乱れて背状に吹きしなつて、恰も赤髮藍面の夜叉の、

一個水牛に化して、苜蓿の上を駆け来たる如く、もの凄しく望まれた。

## 三

前途七里焼山の茶店に着いて、少時するまで、この友船は境を隔てたやうに別れたのである。

道は大畝りに、乗上り乗下つて、やがて、野は迫り、山来り、巖近づき、川灌いで、やつと砂煙の中を抜けたあたりから、心細さが又増した。樹はいま緑に、流は白い。嵐気瀉る、といふ癖に、何が心細い、と都会の極暑に悩むだ方々からは、その不足らしいのをおしかりになるであらうが、行向ふ、正面に次第に立累る山の色が真暗なのである。左右の山々は、次第次第に、薄墨を合せ、鼠を濃くし、紺を流し、峰が漆を刷く。

「さあくさあ、そろく怪しくなりましたな。」

「怪談ですか。」

「それ処ですか、暗く成つて来ましたなあ、鳴りさうですね。鳴りさうですね。三角さんが、」

「大丈夫、よく御覧なさい、あの濡れたやうに艶々と黒くすこい中に……」  
 をがきはらし くち  
 小笠原氏が口を入れて、

「あの中が、これから行く奥入瀬の大溪流でがすよ。」

だから、だからいはぬ事ではない、私は寒気がして来た。

「いゝえ、——黒く凄い中に、薄く…光る…は不可ませんか。」

と博士が莞爾して、

「黒く凄い中に、紫色が見えまじやう。高山は何処もこの景色です。光線の工

合です。夕立雲ではありません。」

白哲蒲柳の質に似ず、越中国立山、剣ヶ峰の雪を、先頭第四十何人目かに

手鉤に掛けた、登山においては、江戸の消防夫ほどの侠勢のある、この博士の言を信ずる

と、成程、夕立雲が立籠めたのでもなさうで、山嶽の趣きは墨染の法衣を襲ね

て、肩に紫の濃い袈裟した、大聖僧の態がないでもない。が、あゝ、何となくぞくぞく

する。

忽ち、ざつとなつて、ポンプで噴くが如く、泥水が輪の両方へ進ると、ぼしやん

と衣裳鞆に刎ねかゝつた。運転手台の横腹へ綱を掛けて積んだのである。しま

つた、借りものだ、と冷りとすると、ぎつ、ぎぶり、ばしやツ。弱つた。が、落着いた。緑蝶夫人の貸し振を思へ。——「これは、しやぼん、鰹節以上ですな。——道中損する事承合ですぜ。」「鞆は汚れたのが伊達なんですとき。——だから新しいのを。何うぞ精々傷めて来て下さいな。」最う一つ落着いたのは、……夏の雨だ。こゝらは最う降つたあとらしい、と思つたのである。

「小笠原さん、降つたんですね。」

「いや、昨日の雨ですわい。」

御勝手になさい、膠のないこと夥しい。然やうでございませうとも、成程晴れたのではない。窓をたよるほど暗さが増して気の滅入る事又夥しい。私は家が恋しくなつた。人間女房の恋しく成るほど、勇気の衰へる事はない。それにつけても、それ、その鞆がいたはしい。行つた、又ばしやり、ばしやん。

もつて、この辺既に樹木の茂れる事思ふべし。焼山は最う近い。

近い。が焼山である。唐黍も焦げてゐやう。茄子の実も赤からう。女気に遠ざかる事、鞆を除いて十里に余つた。焼山について休んだ処で、渋茶を汲むのはさだめし皺くたの……然ういへば、来る道の阪一つ、流を近く、崖ぶちの捨石に、竹杖を、



ひよろくと、猫背へ抽いて、齢、八十にも余んなむ、卒塔婆小町を正で見る婆さんが、ぼやり、うつむいて休んでゐた。そのほかに殆ど人影を見なかつたといつても可い。——あんなのが「飲ましやい。」であらうと観念したのであつたから。

「今日は——女房さん。」

珊瑚の枝を折つてゐた、炉の焚火から、急いで立つて出迎へた、もの柔かな中形の浴衣の、髪の毛の濃いのが見た時は、慌てたやうに声を掛けた。

焼山の一軒茶屋、旅籠に、雑貨荒物屋を兼ねた——土間に、（この女房さんなら茶も熱い）——一椀を喫し、博士たちと一息して、まはりの草の広場を、ぢつと視ると、雨空低く垂れつゝ、雲は黒髪くろかみの如く野に捌けて、棟を絡ひ、檐に乱るゝとゝもに、向うの山裾やますそに、ひとつ、ぽつんと見える、柴小屋の茅屋根に、薄く雨脚あめあしが掛かつて、下草さそに裾をぼかしつゝ、歩行くやうに、次第しだいに此方へ、百条となり、千条と成つて、やがて軒前に白い簾を下ろした。

この雫に、横頬よこほを打たれて、腕組うでぐみをして、ぬい、と立つたのは、草鞋わらぢを吊つた店の端近はぢかに踞すわんだ山漢やまをこの魚売うをうりで。三枚の筈まに魚鱗うろこが光つた。鱗は光つても、其が大蛇だいじゃでも、此の静かな雨では最もう雷光いなびかりの憂慮きづかひはない。見参けんさん、見参けんさんなどゝ元氣げんきついて、

説明を待つまでもない、此の山深く岩魚のほかは、予て聞いた姫鱒にておはすらむ、カバチエツポでがんせうの、と横歩行きして見に立つ勢ひ。序にバスケットを探つて、緑蝶夫人はなむけする処のカクテルの口を抜いた。

「凄い婆さんに逢ひましたよ。」

「大雨、大雨。」

と、画工さん、三浦さんがぼたくと出た、その自動車も、柴小屋を小さく背景にして真直に着くと、吹降を厭つた私たちの自動車も、じりりと把手を縦に寄つた。並んだ二台に、頭からざつと浴せて、軒の雨の篠つくのが、鬘を敲いて、轡頭を高く挙げた、二頭の馬の鼻柱に灌ぐ風情だつたのも、谷が深い。

が、驟雨の凄じさは少しもない。すぐ、廻り縁の座敷に、畳屋の入つてゐたのも、何となく心ゆく都の時雨に似て、折から縁の端にトントンと敲いた莫塵から、幽に立つた埃も青い。

はじめよりして、ものゝ可懐しかつたのは、底暗い納戸の炬に、大鍋と思ふのに、ちらりと搦んで居る焚火であつた、この火は、車の上から、彼処に茶屋と見た時から、迷つた深山路の孤屋の灯のやうに嬉しかつた。女房の姿に優しかつた。

かべてんじやう 壁天井、煤のたゞ黒い中に、火は却つて鮮かである。この棟にかゝる蔦はいち早くもみぢしよう。この背戸の烏瓜も先んじて色を染めよう。東京は遙に、家は遠い。……旅の単衣のそゞろ寒に、膚にほの暖かさを覚えたのは一杯のカクテルばかりでない。焚火は人の情である。

ひらくくと揚がり、ひらくくと伏して、炉に靡く。焚火は襷の桃色である。かくて焼山は雨の谷に美しい。

ひそかに名づけて、こゝを村雨茶屋といはうと思つた。小降りになつた。白い雲が枝に透す。

「何を煮てゐなさるんですか、女房さん。」

出立つ時、私は、納戸のその鍋をさしてきいた。

「はい？」

「鍋に何を煮なさいますか。」

「小豆でございます。」

と言ふと、女房は容子よく、ぼつと色を染めた。

私はその理由を知らない。けれども、それよりして奥入瀬川の深林を穿つて通る、激

きりう 流、飛瀑、碧潭の、到る処に、松明の如く、灯の如く、細くなり小さくなり、また  
 ひらめ 閃きなどして、——子の口の湖畔までもなつたのは、この焚火と、——一茎の釣舟草  
 はな の花のあつたことを忘れない。

「しばらく、一寸。」

焼山を一町ばかり、奥入瀬口へ進んだ処で、博士が自動車留めていつた。

「あの花を知つてゐなさいますか——一寸、お目に掛けませう。」

自動車を引き戻し、ひらりと下りるのに、私も続くと、雨にぬれた草の叢に、優しい  
 あさぎ 浅黄の葉を掛けて、ゆらくと咲いたのは、手弱女の小指さきほどの折鶴を乗せよう、  
 をがさはらし おなじく折つた小さな薄黄色の船の形に連り咲いた花である。「一枝」と意を得ると、  
 かほ 小笠原氏の顔を出して、事もなげに頷くのを見て、折り取る時、瀬の音が颯と響いた。

やがて交る／＼手に翳した。

釣り舟草は浮いて行く。

たちま 忽ち見る、車の輻は銀に、轍は緑晶を捲いて、水が散つた。奥入瀬川の瀬に入つた  
 のである。

これよりして、子の口までの三里余は、たゞ天地を綾に貫いた、樹と巖と石と流の洞

窟くつと言いつて可よい。雲くも晴はれても、雨あめは不ふ断だんに降ふるであらう。櫓なら、桂かつら、山毛櫓ぶな、樅かし、大たい木ぼく大たい樹じゆの其その齡よはひ幾いく干ばくなるを知しれないのが、蘚せん苔たい、蘿ら蔦てうを、烏しやく金どうに、青銅せいどうに、鍊れん鉄てつに、刻きぎんで掛かけ、鑄いて絡まうて、左さい右うも、前ぜん後ごも、森もりは山やまを包つみ、山やまは巖いはを置たみ、巖いはは溪けい流りうを穿うち來きたる。……

色いろを五い百は機たの碧あを緑みどりに織おつて、濡ぬ色れいろの艶つや透すきとほ薄うす日ひの影かげは——裡うちに何なにを棲すますべ  
き——大おほなる琅らう玕かんの柱はしらを映はし、抱いだくべく繞めぐるべき翡翠ひすゐの帳とばりの壁かべを描えがく。

この壁かべ柱はしらは星座せいざに聳そびえ、白雲はくうんに跨またがり、藍水らんすゐに浸ひたつて、露つゆと雪しづくを鏤ちりめ、下草したくさの  
葎むぐらおのづから、花はな、禽きん、鳥とり、虫むしを浮彫うきぼりしたる氈せんを敷しく。

氈せんの上うへを、溪流けいりうは灌そぎ、自動車じどうしゃは溯さかのぼる。

湖みづうみの殿堂でんどうを志こころす、曲きよく折算せつふるに暇いとまなき、この長ながい廊下らうかは、五町右ちやみぎに折をれ、十町左ちゆざり  
に曲まがり、二つに岐わかれ、三つに裂さけて、次第しだい々々くに奥おく深ふかく、早はやきは瀬せとなり、静しづかなるは湍たぎ  
となり、奔はしるは湍たぎとなり、巻まけるは渦うずとなつて、喜よろこばせ、樂たのしませ、驚おどろかせ、危あやぶがらせ、ヒ  
ヤリとさせる。目めの前に、幾いく処ところか、凄すさまじき扉とびらと思おもふ、大磐石だいばんじやくの階壇かいだんは、瀧たき壇だん  
の数かずに落おしかけ、落おつる瀧たきは、自動車じどうしゃを空そらへ釣つる。

呪じゆなく、券てがたなきに、この秘閣ひかくの廊下らうか、行ゆく処ところとびら、扉とびらおのづから開ひらけ、柱はし來きたり迎むかふ感かんがあ



釣り舟草は浮いて行く。

中に一所、湖神が設けの休憩所——応接間とも思ふのを視た。村雨又一時はらゝと、露しげき下草を分けつゝ辿ると、藻を踏むやうな湿潤な汀がある。森の中を平地に窪んで、居る処も川幅も、凡そ百畳敷きばかり、川の流が青黒い。波、波、波は、一面に陰鬱に、三角に立つて、同じやうに動いて、鱗のざわくと鳴る状に、蝶螻の群る状に、寂然と果しなく流れ流るゝ。

寂しく物凄さに、はじめて湖神の片影に接した思がした。

三方は、大巖夥しく累つて、陰惨冥々たる樹立の茂は、根を露呈に、石の天井を蛇り装ふ——この椅子は、横倒れの朽木であつた。

鱗の波は、ひたくと装束上つて高く打つ。——所謂「石げど」の勝である。

馬の胸中ほどの石の、大檜、古槻の間に挟つて、空に架つて、下が空洞に、黒鱗の淵に向つて、五七人を容るべきは、応接間の飾棚である。石げどはこの廠の名なのである。が、魔の棲むべき岩窟を、嘗て女賊の隠れ家であつたと言ふのは惜い。

隣郷津軽の唐糸の前に恥ぢずや。女賊はまだいゝ。鬼神のお松といふに至つては、

余りに卑しい。これを思ふと、田沢湖の街道、姫塚の、瀧夜叉姫が羨しい。が、何だか、もの欲しさうに、川をラインとか呼ぶのから見れば、この方が遙にをかしい。雲は黒くなつた。淵は愈々暗い。陰森として沈むあたりに、音もせぬ水は唯鱗が動く。

時に、廊下口から、扉の透間から、差覗いて、笑ふが如く、響むが如く、ニタリ、ニガリと行つて、彼方此方に、ぬれくと青いのは紫陽花の面である。面でない燐火である。いや燈籠である。

しかし、十和田一帯は、すべて男性的である。脂粉の気の少ない処だから、此の青い燈籠を携ふるのは、腰元でない、女でない。

木魅、山魅の影が添つて、こゝのみならず、森の廊下の暗い処としいへば、人を導くが如く、あとに、さきに、朦朧として、頭はれて、萼の角切籠、紫陽花の円燈籠を幽

に青く聯ねるのであつた。

釣舟草は浮いて行く。

焚火は幻に燈れて続く。

車の左右に手の届く、数々の瀧の面も、裏見る姿も、燈籠の灯に見て、釣舟草は



浮いて行く。

瀧のその或ものは、雲にすぼめた瑪瑙の大蛇目の傘に、激流を絞つて落ちた。また或ものは、玉川の布を繋いで、中空に細く掛かった。その或ものは、黒檀の火の見櫓に、星の泡を漲らせた。

やがて、川の幅一杯に、森々、涼々として、却つて、また音もなく落つる銚子口の大瀧の上を渡つた時は、雲もまた晴れて、紫陽花の影を空に、釣舟草に、ゆらくと乗心地も夢かと思ふ。……橋を這つて、はつと見ると、こゝに晃々として滑らかなる珠の姿見に目が覚めた。

湖の一端は、舟を松蔭に描いて、大弦月の如く輝いた。

水の光を白砂にたよつて、子の口の夕べの宿に着いたのである。

「御馳走は？」

「洋燈。」

といつて、私はきよとりとした。——これは帰京早々お訪ねに預かつた緑蝶夫人の問に答へたのであるが——実は子の口の宿が洋燈だつたので、近頃余程珍しかった。それが記憶に沁みてゐて、うっかり口へ出たのである。

ランプも珍しいが、座敷もまだ塗立ての生壁で、木の香は高し、高縁の前は、すぐに檜の太木大樹鬱然として、樹の根を繞つて、山清水が潺々と音を寂に流れる。……奥入瀬の深林を一処、岩窟へ入る思ひがした。

さて御馳走だが、その晩は、鱒のフライ、若生蕈と称ふる、焼麩に似たのを、てんこ盛り碗の盛。

「ホツキ貝でなくつてよかつたわね。」

「精進のホツキ貝ですよ。それにジャガ芋の煮たの。……しかしお好み別誂でいて、鳥のブツ切と、玉葱と、凍豆腐を大皿に積んだのを鉄鍋でね、湯を沸立たせて、砂糖と醤油をかき交せて、私が一寸お塩梅をして」

「おや、気味の悪い。」

「可、と打込んで、ぐらくくと煮える処を、めいぐ盛に、フツフと吹いて、」  
「山賊々々。」

と冷かしたが、元来、衣裳鞆の催促ではない、ホツキ貝の見舞に来たのだから、先づ其次第を申述べる処へ……又近処から、おなじく、氷砂糖、梅干の注意連の女性性が来り加はつた。次手だから、次の泊の休屋の膳立てを紹介した。鱒

の塩しほやき、小蝦こゑびのフライ、玉子たまご焼、鱒ますと芙蓉ずいぎの葛くづかけの椀わん。——昼ひると晩ばんの順じゆんは忘わすれたが、  
鱒ますと葱ねぎの玉子たまご綴とち、鳥とりのスチウ、鱒ますのすりみと椎茸しひたけと茗荷めうがの椀わん。

「鱒ます、鱒ます、鱒ます。」

「ますく、出でます。」と皆みなで笑わらふ。何なにも御馳走ごちそうを食たべに行くゆく処ところではない。景色けしきだ、これから、前記ぜんき奥入瀬おいらせの奇勝きしようを説とくくこと一番ばんして、此この子ねの口くちの朝あさぼらけ、汀みぎの松はまつはほんのりしまみどりと、島しまは緑みどりに、波なみは青あをい。縁前えんまへのついでその森もりに、朽木くちきを啄つむ啄くちき木鳥つばきの、青あをげら、赤あかげらを二羽はふ視みながら、寒さむいから浴衣ゆかたの襲かさねぎ着ぎで、朝酒あさざけを。——当時たうじ、炎威えんゐ猛勢もうせいにして、九十三度半どはんといふ、真中まなかで談だんじたが、

「だからフランネルが入はいつてるぢやありませんか、不精ぶしやうだね。」

と女房かゝあめが、風流ふうりうを解かいしないこと夥おびたゞしい。傍そばから、

「その為ための鞆かばんぢやあないの。」

で、一向かうに涼すずしきなんぞ寄よせつけない。……たゞ栈橋さんぼしから、水際みづぎはから、すぐ手てで掬すくへる小瑕こゑびの事こと。……はじめ、羽はねの薄うすい薄蕨うすもえぎの蟬せみが一疋びき、波なみの上うへに浮ういて、動うごいてゐた。峨峰がほう、嶮山けんざんに囲かこまれた大湖たいこだから、時々とき／＼颯さつと霧きりが襲おそふと、この飛とんでるのが、方ほう角かくに迷まよふうちに羽はねが弱よわつて、水みづに落おちる事ことを聞きいてゐた。——上あげてやらうと、杖ステッキで、

……かう引くと、蟬の腹に五つばかり、小さな海月の脚の様なのが、ふらふらとついて泳いで寄る、食つてゐるやがる——蝦である。引寄せても逃げないから、密と手を入れると、尻尾を一寸ひねつて、二つも三つも指のさきをチヨ、チヨツと突く。此奴と、ぐつと手を入れると、スイと掌に入つて来る。岩へ寄せて、ひよいと水から取らうとすると、ア、擦つたい、輪なりに一つピンと刎ねて、ピヨイとにげて、スイと泳いで、澄ましてゐる。小雨のかゝるやうに、水筋が立つほど、幾らでも、といふ……半から、緑蝶夫人は氣を籠めて、瞳を寄せ、もう一人は掌をひらく動かし、じりりと卓子台に詰寄ると、第一番に食意地の張つてる家内が、もう、櫂を掛けたさうに、

「食べられるの。」

「そいつが天麩羅のあげたてだ。ほかくだ。」

緑蝶夫人が、

「あら、いゝ事ねえ、行きたくなつた。」

「私……今からでも。」

度し難い！ 弱つた。教養あり、識見ある、モダンとかう羨しい。

読者よ、かくの如きは湖の宮殿に至る階の一段に過ぎない。其の片扉にして、写し得たる一景さへこれである。五彩の漣は鴛鴦を浮べ、沖の巖は羽音とゝもに鶺鴒を放ち、千仞の断崖の帳は、藍瓶の淵に染まつて、黒き蝶蠟の其の丈大蛇の如きを沈めて暗い。数々の深秘と、凄麗と、莊嚴とを想はれよ。

——いま、其の奥殿に到らずとも、真情は通じよう。湖神のうけ給ふと否とを料らず、私は階に、かしは手を打つた。

ひそかに思ふ。湖の全景は、月宮よりして、幹紫に葉の碧なる、玉の枝より、金色の斧で伐つて擲つたる、偉なる胡桃の実の、割目に青い露を湛へたのであらう。まつたく一寸胡桃に似て居る。

(完)



# 青空文庫情報

底本：「新編 泉鏡花集 第十卷」岩波書店

2004（平成16）年4月23日第1刷発行

底本の親本：「日本八景」鉄道省

1928（昭和3）年8月1日

初出：「東京日日新聞 朝刊第一八三五一号〜第一八三五九号」東京日日新聞社

1927（昭和2）年10月1日〜9日

「大阪毎日新聞 夕刊第一五九五〇号〜第一五九五三号、第一五九五五号〜第一五九五九号」大阪毎日新聞社

1927（昭和2）年10月13日〜16日、18日〜22日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※表題は底本では、「十和田湖《とわだこ》」となっています。

※初出時の署名は「泉鏡花」です。

入力：日根敏晶

校正：門田裕志

2016年8月31日作成

2016年9月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 十和田湖

泉鏡太郎

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>